



My first encounter with Japan and her friendly people

Naomi W. N. Maina

(Kenya Trypanosomiasis Research Institute)

I stayed in the city of Obihiro, Hokkaido for four days and later Makuhari, near Tokyo for eight days (17 Aug — 31 Aug 1998). The country is well developed in comparison with countries such as UK and South Africa I have visited. The Japanese were very polite and friendly.

The scientific program was quite broad and was mainly in basic sciences. There is quality research going on in Japan in vaccine and drug development in most parasitic diseases. I had the occasion to interact with Japanese scientists and made good contacts.

On my onward journey, I had various connections to make, but this was made easy by both the signs translated into English and the very kind assistance from the Japanese people. I therefore did not get lost and was quite relaxed even after the two days of travel.

The transport system (bus and train) is efficient, comfortable and extremely clean. The security system is also very good and as such I enjoyed the late evening walks. The Japanese food, mainly seafood, is well displayed and very attractive to the eyes. It is very tasty especially when using the chopsticks. There is a choice though of American food.

Japanese are a very hard working community and as such the social events were rare (only one party!) during the meeting. There was however a ladies' program at which I had the opportunity to try out the *kimono* and learn some paper crafts. The most difficult part was shopping for clothes. The Japanese being relatively smaller than I, I had to ask for the biggest size, which at times was itself small. I must say I enjoyed my short stay in Japan. Being a foreigner the treatment was enjoyable and I would long to go back in future.

Milima haikutani, lakini binadamu hukutana.

山と山は出会わないが、人は出会うものだ。(スワヒリ語のことわざ)

Special thanks are due to JSPS Research Station, Nairobi for the special assistance and moral support during the preparation period.

はじめての日本——すばらしい人々との出会い

ナオミ・マイナ (ケニア・トリパノソーマ症研究所)

この8月17日から31日まで、わたしは国際寄生虫学会などに参加するため、帯広市と幕張をおとずれました。日本はわたしがこれまでにおとずれたイギリスや南アフリカにもまして、よく発展した国でした。そして日本人はとても礼儀正しく親切でした。

学会のプログラムは非常に広範で、基礎科学に属するものが主でした。日本では、ほとんどの寄生虫病にわたって、ワクチンと薬剤による治療法についての高度な研究がおこなわれています。わたしは日本の研究者たちと交流し、よい関係をきづく機会を得ました。

国内旅行では、さまざまな乗りつきがありました。英語表記のある標識と人びとの親切にたすけられました。おかげでわたしは道にまようこともなく、日本に来て3日目にはすっかりリラックスできるようになっていました。

バスや列車などの交通機関は効率的かつ快適で、またとても清潔です。治安もとても良く、夜おそくに散歩を楽しめるほどです。日本料理、とくにシーフードは上手に盛りつけてあり、たいへん目を楽しませてくれるもので、お箸を使って食べると格別おいしく感じられます。もちろんアメリカ式の食事を注文することもできるのです。

日本人は非常に勤勉なのか、学会のあいだも社交的なイベントはパーティーが1回あったきりでした。けれども女性むけのプログラムがあり、わたしは「きもの」を着てみたり、おり紙をなったりしました。ただ、服を買うときにはちょっと困りました。日本人は一般的にわたしよりも小さいので「いちばん大きなサイズを」と頼まなければなりませんでしたが、それでもまだ、わたしには小さいことがあったからです。

短かったけれど、とてもたのしい日本滞在でした。外国人であるわたしを、よくおもてなしいただきました。いつかまた、おとずれることができると願っています。

出発の準備にあたって、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターには、物心両面にわたる格別のご援助をいただきましたことをあつく御礼もうしあげます。

センター・ニュース

できごと

9月

1日 Tharcisse Ukizitambara 氏 (ケニア国立博物館、生物学) 来訪。

菊川水際氏、植松久美子氏、菊池美貴子氏 (筑波大学大学院、文化人類学)、Thuba Galale 氏、Beleisa Galfure 氏、Ngeriyo Galale 氏、Lulsule Galfure 氏、Seleban Orbora 氏、Gesile

- Galale 氏 (研究協力者)、北ケニア Marsabit 州より来訪。
- 2日 Josef Methu 氏 (ケニア農業研究所、低品位飼料の活用)、日本での研究の機会を求めて来訪。
Francis Kibe Kiragu 氏 (ナイロビ大学アフリカ研究所教員、文化人類学) 来訪。松田素二氏 (京都大学、文化人類学) と懇談。
Muruthi Kinyua 氏 (ナイロビ大学教員、美学) 来訪。
Edward Mburugu 教授 (ナイロビ大学、社会学) 来訪。太田至氏 (京都大学教員) と懇談。
- 3日 辻川寛氏 (京都大学大学院)、Kiptalam Cheboi 氏、Kimeo 氏、Ambrose Ichom 氏、Fikrin John Fidelis 氏 (研究協力者)、ケニア Samburu Hills より来訪。
- 3日~25日 足達太郎駐在員、熱帯アフリカのマメ科作物害虫に関する調査および研究所訪問のため、ガーナ共和国およびベニン共和国を訪問。
- 6日~8日 安溪遊地駐在員、カカメガの森訪問。熱帯雨林の保全について Wilberforce Okeka 氏 (カカメガ生物多様性保全ガイド協会) と懇談、9月の学振セミナーの講師を依頼。
- 7日 Mwangi Milinganyo 氏 (ナイロビ大学大学院、動物学) 来訪。
小林豊文氏 (IOS、記録映画製作) 来訪。
- 10日 Naomi W. N. Maina 氏 (ケニア・トリパノソーマ症研究所)、日本での学会参加協力への答礼と報告のため来訪。
- 11日 菊池滋夫氏 (明星大学教員、文化人類学) ケニア Kilifi District での調査を終えて来訪。
- 16日 小馬徹氏 (神奈川大学教員、文化人類学) ケニア Bomet District での調査を終えて来訪。
野崎剛一氏 (放送大学学園、ディレクター) ケニア、レンディール・トゥルカナ地区での撮影を終えて来訪。
秋吉博之氏 (JICA 専門家、生物教育/神戸大学大学院国際協力研究科) 来訪。
- 19日 作道信介氏 (弘前大学、社会心理学) 来訪。
- 21日 Rose Kariuki 氏 (ナイロビ大学、獣医学) 来訪。
- 23日 Ekalale Gabriel 氏 (ケニア国立博物館、古生物学部門)
- 25日 藤本武氏 (京都大学人間環境学研究科) 来訪。
- 26日 第132回学振セミナーおよび懇親会開催。
- 27日 Robert Copeland 氏 (国際昆虫生理生態学センター、昆虫学) 来訪。

アフリカニスト自己紹介

(順不同です)

菊地滋夫 (KIKUCHI Shigeo 明星大学人文学部)

こんにちは。私はケニア海岸地方後背地の社会と宗教に関心を持っている者です。スワヒリ商人などとの数百年にも及ぶ接触や交流にもかかわらず、ほとんどイスラーム化が進んでいない後背地社会の在り方に興味を抱いたのが研究の出発点です。3年ぶりの調査になる今回は、憑依霊信仰とも連動した緩やかなイスラームへの改宗の動きを中心に見てきました。

藤本武 (FUJIMOTO Takeshi 京都大学大学院人間環境学研究科博士課程)

今朝ナイロビに着きました。明日の朝の便でエチオピアに向かいます。今度ではや三回目の滞在になります。これまで西南部の山岳地帯に暮らすマロという農耕民を対象に文化人類学の調査を行ってきましたが、今回もそこに行く予定です。農耕体系の調査を継続するつもりです。半年後に帰る際にまた立ち寄りたと思います。

石山勝敏 (ISHIYAMA Katsutoshi フォトグラファー)

ゆっくりと流れる時間の中で過ごしたケニアでの2週間は、私にとってとても貴重な時間でした。写真のプロの世界に入って、もうすぐ20年が過ぎようとしています。今、私のフォトグラファーとしての世界が大きく変わろうとしている時期です。依頼を受けた写真を写す仕事から、自分で被写体を選び創作していく作業へと変わろうとしています。「美しく生きるものたち」。これから、この言葉をキーワードに写真を創って行きたと思います。またアフリカの土を踏める事を楽しみにしています。

学振のうれしいおもてなし

河合香吏 (静岡大学)

1986年にケニアで調査をはじめて以来、学振の歴代駐在員のかたがたにはほんとうにお世話になってきた。

私のフィールドはナイロビから約350キロメートルほど北へいったバリンゴ湖の東、アカシアのブッシュやサバンナの広がる乾燥地帯である。ウシ、ヤギ、ヒツジを追い、ちいさな畑からとれたりとれなかったりするトウモロコシやソルガム、シコクビエなどを作って生活するチャムスという人びとと暮らしてきた。

チャムスでは、彼らといっしょに彼らの作る食事をしている。朝はヤギのミルク入りのチャイ。でも、これはぜいたくなおとなの食事である。子どもたちは、シコクビエやトウモロコシを挽いた粉をお湯で溶いたウジ(重湯のようなもの)を飲む。あるいはウシのミルクをたっぷり飲む。昼は食べないこともおおいのだが、トウモロコシの収穫時にはもぎたてを焼いたものが美味できた。ほんのりと甘くてとてもおいしいものだ。夕方、家畜が帰ってくると、またチャイを飲んで夕飯までの時間を過ごす。暗くなってからの夜の食事はしっかりと食べる。たいていは、ウガリ・ナ・マジワ(練り粥とミルク)か、ウガリ・ナ・マジワ・ラーラ(練り粥とヨーグルト)である。

チャムスのメニューはいたってシンプルで、凝った料理はほとんどない。たまにはヤギやヒツジの肉を食べることもあるが、ふだんはウガリ・ナ・マジワ、もしくはウガリ・ナ・マジワ・ラーラばかり。ウガリにはスープか煮込み料理が欲しいものだけでも、スクマウィキもトマトもタマネギも、乾燥したチャムスの地では入手困難なのである。はじめはウガリに「塩」などかけて食べていた私も、いつしかミルクやヨーグルトでウガリを食べる牧畜民の食事に慣れた。

そんな食生活だったから、フィールドからでてきたときの食事は、ただ「複雑」な味であるというだけで、また別の楽しみとなった。ナイロビのレストランもいいけれども、学振でごちそうになった食事は格別である。お昼や夕飯をなんでもごちそうになったが、最近では、スタッフのエミィさんとエルダさんの作った Royco (調味料) 味のお昼ごはんをおいしくいただいた。

学振セミナーのあとのパーティーの食事もうれしいものだった。駐在員さんたちはみなさん工夫をこらしておられ、それぞれに個性的なメニューが楽しみだった。

広いお庭でのニヤマ・チョマ (焼肉)。ナイロビ郊外のランガタまで行ってヤギを一頭買ってくる。屠殺、解体からすべてスタッフの手によるもので、特製のタレがご自慢の駐在員さんもいた。ニワトリのつぶしかたを教わったのも学振の庭だった。ささ身のはずしかたはついにマスターでできなかったけれども。

前菜に凝る駐在員さんもいた。さまざまな種類のチーズや生ハム、コールド・ミート、それにお手製のピクルスがおいしかった。

モンバサからとどいたばかりの魚をお刺身にして手巻き寿司とか、お鍋といった日本食メニュー、手打ちでうどんを作ってしまうという特技を披露された方もいた。手打ちといえば、みんなの手づくり餃子に挑戦したこともある。すこし厚めのもこもこした皮も、また味わいぶかいものだった。

単身でこられた男性ふたりがペアのときだったと思う。ナイロビ在住の日本人のかたがたがそれぞれにすこしずつ手料理をもちよってくださり、突如、豪華メニューになるなんてこともあった。駐在員さんといっしょに私たちが作ったのは、おにぎりとサラダぐらいだった。

お酒好きのふたりがペアになったときには、いつもテーブルには何種類ものワインが、「どうだ！」といわんばかりに並んでいたという話もある (残念ながら、私はこの年にはケニアに来ていない)。

乾いた大地でのシンプルな食事私も好きだが、ナイロビに出てきたときの学振の「おもてなし」は、ケニア滞在が長期になればなるほど、うれしいものであったことはまちがいない。そして、駐在員のかたがたやおおぜいの研究者とおしゃべりのできる時間はとてもたのしい。

学振のさまざまな業務でお忙しい中、こうしたぜいたくなひとときをくださった歴代駐在員さんたちのご好意に心から感謝するとともに、私もそろそろ「おもてなし」をする側にまわらなくちゃと思っています。

Parties in the JSPS Nairobi Office

KAWAI Kaori (Shizuoka University)

Since 1986, I have in many occasions stayed with the Chamus people to learn their way of life in the semi-arid land to the east of Lake Baringo, some 350 kms to the north of Nairobi. There I enjoyed their food. In the morning they serve *chai* with goat milk in it for grown-ups, and cow milk or *uji*, porridge made of finger millet and maize flour for children. Roasted fresh maize cobs were lunchtime delicacies of

the harvest season. After dark, they serve dinner of *ugali* with milk or yogurt. At first it seemed tasteless for me, and I used to sprinkle salt on it. After some time I could eat it without the aid of salt.

You can imagine the mental and physical gap I experienced every time I was back in Nairobi where restaurants seem to have completely forgotten the pastorarists' tradition. Among the complicated tastes of Nairobi, invitations by the colleagues of the JSPS office offered a special fantasy for me.

Official garden parties held after JSPS seminar were the fruits of the talents and endeavours of the JSPS staff. I encountered with elaborated cuisine from many countries, and learned a lot of recipes during private parties held by the office staff. I learned, among others, butchering and dismembering goats or hens for *nyamachoma*, preparing a variety of Japanese and Chinese food from material available in Nairobi, i.e. *sushi*, *sashimi* and so on.

Thus I could enjoy not only simple and healthy cuisine of the dry land, but also a really international food of Nairobi thanks to the JSPS Office and its staff, who so warmly accepted me and invited me for formal and private parties. And I believe it is now my turn to welcome people instead of being welcomed.

第 132 回学振セミナー

日時：1998年9月26日（土）午後2時～4時

話題：「森とともに生きる人々——ケニアと日本における森林保全の課題」

話し手：ウィルバフォース・オケカ氏（カカメガの森の守り手）・安溪貴子氏（生態学）・安溪遊地氏（生態人類学）

使用言語：英語・スワヒリ語・日本語 参加人数：37名

内容：ケニアで唯一の熱帯雨林が残っているとされるカカメガの森で、民間のガイド協会を組織し、子ども達を森に招いて森とともに生きる智慧とそのすばらしさを伝えるなどのユニークな活動を通して森林保護運動に力を注いでこられたウィルバフォース・オケカ氏をお迎えして、その様々な取り組みの現状と夢についてお話しいただきました。オケカ氏は、KABICOTOA（カカメガ生物多様性保全ガイド協会）、KEEP（カカメガ環境教育プログラム）、KARECSEN Group（カカメガ地域キリスト教科学環境グループ）、Isecheno Wildlife Group（イセチェノ村野生生物保護グループ）などの多彩な団体の設立と運営に関わっておられます。

対談の形でお話をうかがいながら、西表島と屋久島での自然保護やエコツーリズムの発展の経緯を中心に、日本での事例も紹介されました。土地に伝わる智慧を受け継ぎ、将来の子どもや孫の世代のために森を守ることができるのは誰であろうかという問題をめぐって、参加者の皆様とともに議論がはずみました。オケカ氏のお話の中から、「木にもいのちがある」という部分の抜粋をお届けします。

私は小学校しか出ていませんが、あなたがたのような研究者と話すことによってずいぶんたくさん教えを受けてきました。本当にありがたいことと思っています。私は、以前はカカメガの森のパトロールをしていました。でも、地元民の反感を買うような野蛮な方法では森は守れないことを思い知ったのです。必要なのは、教育であり、自覚です。われわれは、ある木が明日はどんな役にたつものかも知らないで今日切ってしまうということを平気でして

います。木にもいのちがある、ということがわからないからです。環境は、神の創りたもうたものです。それを壊してしまうということはどういうことでしょうか。神はすべてのものを創造され、われわれに「壊してはならない」とお命じになりました。アダムとイブはこの命令を破った時、エデンの園を追われました。それなのに、われわれキリスト者が森を破壊するとはいったいどういうことでしょうか。心と智恵と力をひとつにして森を守らねばなりません。今は、森のまわりに住む子どもたちを毎週森に招いて、森の魅力や生活にとっての意味について学んでもらっています。たくさん子どもがきたら、それぞれれちがう仕事を分担してもらいます。例えば、水汲み、稚苗圃の整備、ごみ拾いなどです。飲んだあとのミルクの紙箱なんかを苗箱になります。苗が育ったら、森林局に頼んで土地を使わせてもらい、木を植えようと考えています。その木が育てば、自分たちの子どもの名札がついた木を切ろうとする大人は誰もいなくなることでしょう。こうした努力に対して、みなさんが、お金でも、物でもアイデアでも私たちを助けてくださることに心から感謝申し上げます。

The 132nd JSPS Seminar

Date: 26th September, 1998

Topic: How can we save the Rainforests? Prospects from Kenya and Japan

Presenter: Mr. Wilberforce OKEKA (Environmentalist of the Kakamega Forest), Dr. ANKEI Takako (Ecologist), and Prof. ANKEI Yuji (JSPS Research Station, Nairobi)

Language: English, Swahili, and Japanese No. of participants: 37

Summary: Mr Wilberforce OKEKA has long worked in the Kakamega Rainforest as an environmentalist. He worked with many scientists, organised a co-operative of trained guides, and is inviting children around the forest to learn its importance and its indigenous knowledge systems. He has organised **KABICOTOA** (Kakamega Biodiversity Conservation Tour Operators Association), and **KEEP** (Kakamega Environmental Education Program), and is encouraging the activities of **KARECSEN Group** (Kakamega Regional Christian Science Environmental Group), **Isecheno Wildlife Group**, and many other associations. Through a dialog with him, Drs. ANKEI Yuji and Takako, JSPS Nairobi Office, narrate their experience in Iriomote and Yaku Islands of Japan, where local people have worked very hard to preserve their rainforest. Participants exchanged ideas on the way in which we can still help these forests from vanishing.

Here is an extract of the words of Mr. Okeka in Swahili entitled "Trees have lives."

Mimi ninashukuru kwa shauri mimi sikusoma sana, lakini ninajifunza kwa marafiki sawa na nyini. Tunaweza kukata mti kwa leo bila kujua kazi yake kanuni. Hawajui kuitumia tena kesho. Watu hawaelewi miti ina uhai. Masingira ni ya Mungu. Sasa tutakuwa tumeharibu masingira namuna gani? Mungu aliumba vitu vyote na akatuambia "musiharibu." Wakati Adam na Eve waliharibu wakafukuzwa. Lakini sisi watoto wa Wakristayo tunaharibu msitu na nini? Si mukuje pamoja halafu mukuje kitu kimoja, mulinde msitu. Ninashukuru pia jinsi mumetusaidia. Asanteni sana.

ーセンターからー

Polepole ni mwendo. (ポレポレ・ニ・ムウエンド) とスワヒリ語でもうします。ゆっくり行った方が結局遠くまで行けるという意味だそうです。本誌も今年4月に創刊して以来、みなさんの積極的なご投稿と応援にささえられ、今号で6号をかぞえることになりました。毎月の学振セミナーとパーティーも空前の大発展で、学振のオフィスがパンクする60人以上の参加があった時もありました。駐在員のひとりの安溪遊地が10月中旬に帰国するのを機に、ここらで少しペースを「ポレポレ」にしてみようと考えています。今号より表紙のロゴも変えました。10月はセミナーをおこない、本誌の発行はお休みということにさせていただきます。引き続きご投稿を歓迎いたします。

編集後記

ト西アフリカのガーナとベニンを旅行してきました。ガーナは7年ぶりの再訪です。7年前とくらべると、ガーナは物質的にとてもゆたかになっていて、その変わりようにおどろきました。人びとの表情も、以前は生活するのに必死という感じだったのが、今はどことなく落ちつきがあるようにわたしには感じられました。そのことをガーナ人の友人に言ったところ、かえってきた言葉は、「きみも落ちつきがでてきたように見えるよ。だって前は、『外人さん!』と声をかけられるたびに、いつも怒っていたじゃないか」というものでした。おかしくて、はずかしかった。(太)
#6月以来、足達さんとめざしてきた目標は、とりくみの内容がよく見えて、アフリカ人にも日本人にも喜ばれ、場当たりでない長続きする活動でした。聖い言葉で言えば広報、公平、サステイナビリティの3つですが、客商売にたとえると、つまりは明朗会計、お客様第一、堅実経営とも言えます。あっという間の4か月。もう帰国です。すてきな人々とともに過ごせたことを感謝しています。わが家族の貴子と大慧にも多くの得るところがあったようです。Asante sana, tutaonana. (遊)

ふくた一な (日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース) 第6号 1998年9月30日発行

編集・発行者/安溪遊地・足達太郎 発行所/日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

Hukutana (The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi) No. 6, 30th September, 1998. Edited by ANKEI Yuji and ADATI Tarô.

© 1998 by JSPS Research Station, Nairobi. All rights reserved. Published by JSPS Research Station, Nairobi, P. O. Box 14958, Nairobi, Kenya. Tel: +254-2-442424 Fax: +254-2-442112 e-mail: jsps@swiftkenya.com

Lithographed and printed at Mukkagis Printers, P. O. Box 979, Kerugoya, Kenya.

Japan Society for the Promotion of Science
Research Station, Nairobi
P. O. Box 14958, Nairobi, KENYA

VIA AIR MAIL
PAR AVION